

メキシコ，地方領袖に関する覚書き¹⁾

——シエラ・ネグラ山岳地域，サカテペック村の一事例から——

長谷川 来 夢

要旨

本研究では，地方社会のカシケ（領袖）²⁾ に関してフィールド調査を行い，それを報告し，カシケがその社会の人々に残した記憶としての歴史³⁾ に関して考察することを目的とする。独立から現在までメキシコに存在するカシケの歴史的意味をナショナルな視点で捉え，次にローカルな視点から見た人々の個人史と重ねることで，よりリアルなメキシコの歴史的社会的変遷を理解できるのではないだろうか。さらにその試みを通じて，ローカル社会からナショナルな社会を読み解くという社会科学研究の一つとして質的調査法，つまり，語りを重視したライフヒストリー研究法の有効性についても合わせて考察していきたい。

目 次

はじめに

I. メキシコの地方ボスについて

- 1) カシケ（領袖）
- 2) コンパドラスゴ
- 3) ライフヒストリー研究法の定義と有効性

II. サカテペック村のカシケに関する語り

- 1) シエラ・ネグラ地方，サカテペック村の概略
- 2) 一介の徴税人から大地主へ，セフェリーノ・コントレラスの生涯⁴⁾

-
- 1) 本研究ノートは2006年に調査を始めて以来，多くの方々のご協力を得て執筆することが出来た。プエブラ州シエラ・ネグラ地方，サカテペック村で出会った全ての方々，また，同村落へと導いてくれたプエブラ栄誉州立自治大学と同大学の研究仲間のご協力無くして現地調査を進めることは出来なかった。さらに，2006年7月から1年間，同大学に交換留学の機会を与えて下さった天理大学，2009年7月から1年間，日墨研修生として留学の機会を与えてくださった日本外務省とメキシコ国家科学技術審議会，留学期間中にメキシコで客員研究生として受け入れて下さったメキシコ社会人類学高等調査研究所にも重ねて御礼申し上げたい。そして，2008年から在籍している大阪経済大学の先生や職員の方々には，留学休学中も変わらず暖かい激励の言葉とご助言を頂いた。心より御礼申し上げたい。特に，大阪経済大学の桜井三枝子先生には2008年から本研究に関して熱心なご指導を承り，このような執筆の機会を与えて頂いた。公私ともに支えてくださった先生に，最大の感謝の意を表すものとする。
 - 2) 「カシケ」に関しては頭領，領主など様々な和訳があるが，本稿では吉田の訳を引用し「領袖」で統一する。
 - 3) 清水透「激変するメキシコ先住民の村チャムーラ——コロニアル・フロンティアの揺らぎ——」南山大学ラテンアメリカ研究センター日本ラテンアメリカ学会中部日本研究部会共催講演会，至南山大学名古屋キャンパス，2010年12月14日講演より。

- 3) 気丈なマグダレナ・コントレラス
 - 4) カシケの未亡人、マグダレナ・コントレラスの人望
 - 5) 口述資料の分析・考察
- おわりに

は じ め に

1821年のメキシコ独立から現在まで、メキシコ連邦政府は近代国家の形成を目的としさまざまな改革を行ってきた。本研究ではⅠで、メキシコの地方ボス、カシケ（領袖）の権力構造を概説する。1) ではカシケの権力構造をパトロン・クライアント関係という視点で分析し、経済的、政治的あるいは文化的にどのような関係であるのか整理する。2) では現代社会において1) の権力構造の維持、あるいは再生産に一役買っているコンパドラスゴ（代親）慣行について説明し、3) ではそれらの概略から論考を進めるため用いるライフヒストリー研究法の定義と有効性を整理する。Ⅱでは近代国家形成の過中にプエブラ州シエラ・ネグラ地方のサカテペック村に実在したカシケ一家の例をあげ、地方レベルでは実際に地方領袖と村人の関係性はどのようなものだったのかを記述する。1) で当該地域の概略を行い、2) では徴税人からカシケに成り上がったカシケの生涯を紹介し、3) ではカシケの妻が村全体がコーヒー豆原価下落による経済危機を迎え、カシケ一家の権威を失いかけた時に、いかに動いたのか、そして4) ではカシケの夫を亡くした後、妻はその権威をどう保持したのかを記述する。最後に5) でその事例を分析し、考察していきたい。

Ⅰ. メキシコの地方ボスについて

Ⅰでは吉田を引用して後述するように、メキシコ独立から近代まで連邦政府と地方との間に生まれる差異を搾取し、地方を支配したカシケ（領袖）についてまとめ、ライフヒストリー研究法の定義と有効性を紹介しⅡの具体的事例につなげたい。

1) カシケ（領袖）

メキシコを含む多くのラテンアメリカ諸国には、先植民地期からカシケ（cacique）と呼ばれるローカルな権勢力をもつ者がいた。カシケとはすなわち、地方の領袖のことである。ユカタン半島のマヤ地域の政治・経済に関する調査研究をしている吉田（文化人類学者）によれば、カシケの社会的機能は国や地域、時代によってバリエーションがあるが、ある限られた地域の中だけで権力を行使する政治的有力者であることに変わりはない。国家の政治システムを地方の社会システムに仲介する政治的媒介の性質を持ち、さらにその媒介の際に生じる差異を搾取する。カシケはスペイン植民地時代に形成され継続した権力構造に組み込まれており、パトロン＝クライアント関係を成立させている⁵⁾。例えば、村

4) 本稿に登場する口述記録の語り手の名前は、本人あるいは故人の家族の了承を得た上で本名を使用している。

5) 吉田栄人 2001「抵抗の政治学」（遅野井 茂雄・他編集）『ラテンアメリカ世界を生きる』新評論、

人がある大きな権力の前に立たされたとき、パトロンであるカシケはその個人を守るべく働く。パトロンとして支持をうけることは、同時にそのクライアントを守る義務があり、その代償としてクライアントの政治的権威を預かるのである。その支配形態は多くの場合インフォーマルで、個人的ネットワークへの依存度が高く、暴力の行使や法制度の侵犯など目的達成のための手段が非合法的で暴力的である点が、カシケ政治の際立った特徴である。農村や都市の貧困地域など、地縁血縁関係が強固である場合に発達する性格をもつため、グローバル化が進みローカル社会でも大幅に経済システムが変化する近代化の過程で、カシケ政治は消滅すると考えられていた。しかし近代化の進んだ現在においてもそのカシケ政治は一掃されることなく続いている。吉田の論考によれば、その理由はカシケ政治がヒエラルキーと社会的権威をめぐる農村社会の価値観に支えられたものであるからだ⁶⁾。さらに、カシケが生成したパトロン＝クライアント関係として広げたネットワークが個人的なレベルのものであり、カシケが仲介者として政治的社会的機能を果たしてくれるという暗黙の了解の下に人々は政治的主体となり得る個々人に権力を委譲している⁷⁾。カシケは最初から地域に存在したのではなく、国家と地域社会が繋がる過程でその仲介能力を有するものによって生成された存在である。このような体制をカシキスモ (caciquismo) と呼び、フォーマルな政治体制の中でカシケは補助的な役目を果たしている⁸⁾。

2) コンパドラスゴ

ラテンアメリカの擬制親族制度に関して佐藤によれば、コンパドラスゴ慣行とは代父母 (コンパドレ) と実父母との間の関係とそれに伴う慣行のことである。カトリック世界では洗礼を信仰の誕生とし、実際の誕生よりも重視する。その洗礼の際に代父母をたて、その後は代子の精神的親としての一生の関係を約束する。以後、代子を介して代父母と実父母は信頼関係を築き協力し合い、絆を持つのである⁹⁾。ところが、農村社会や都市部の貧困地域ではその慣行は、有力者をコンパドレとして親族関係に取り込み、コンパドレに対する一方的奉仕を行い、その見返りとして庇護を受けるといふ、いわば精神的協力者ではなく経済的協力者としての代父母の慣行へと変貌していった。

その関係性はカシケの持つパトロン＝クライアントの関係性と交差している。カシケの権力構造内に居る者は、コンパドラスゴ慣行を通じてパトロン＝クライアント関係をより強力なものにしている。つまり、カシケは家族的なネットワークを支配地域の隅々まで張り巡らした家父長的ボスであると言える¹⁰⁾。コンパドラスゴの組織化は、農村社会を舞台

161-165頁。

6) 同書、163頁。

7) 同書、164頁。

8) 松下洋「カシキスモ」(大貫良夫・他 監修)『ラテンアメリカを知る辞典』平凡社、107頁、1999年。

9) 佐藤信行「コンパドラスゴ」(大貫良夫・他 監修)『ラテン・アメリカを知る辞典』平凡社、183-184頁、1999年。

10) 吉田栄人、前掲書、164頁。

に伸張し、政治・経済上の底辺にある人々を擬制的に親族として組み込む。こうした関係はその舞台の都市化、産業化とあいまって解体を余儀なくされ、量的には減少するであろうと言われている。しかし、その一方で都市化の進行により、個人間の個人的関係が弱まるにつれて逆に密度の高い親方・子方の結びつき方が進行する傾向も無視できない。フォーマルな政治体制の補助的要素としてカシキスモが残るように、そのカシキスモ体制の補助的要素として、コンパドラスゴ慣行もまた必要とされるのである。そのような地縁で結ばれる関係は特に、貧困区や都市化の遅れている農村地域において重要である。

前述の独立および革命の歴史的経緯の中で、メキシコの地方ボスの特徴と権力構造がいかなるもので、近代化と共にいかに変化してきたのか整理してきた。その結果、地方ボスの存在意義が国家レベルの視点から見れば「パトロン＝クライアント関係」に基づいており、それはグローバル化の進む今日において、経済的協力がその関係性構築の基礎であることが考えられる。

3) ライフヒストリー研究法の定義と有効性

ライフヒストリー研究法の定義を唱えようとしても、その多様な考え方や手法から定義づけできなくなる。そこでその曖昧な研究法の大枠を示すため、ライフヒストリー研究法を行うにあたってあげられるいくつかの概念を記述したい。ライフヒストリー研究法に類似したものとして個人的記録研究法やオーラルヒストリー研究法、ナラティブ研究法などが上げられ、それらは新しい社会調査法として発達してきた¹¹⁾。どの研究法にも共通していえる特徴は、他者の話や個人的記録、人間記録、生活記録など、専門的知見の入った文献資料を加えて構成された記録を使うことである。とりわけ、ライフヒストリー研究法では対象となる個人の主観的現実を社会的、文化的、歴史的脈絡のなかに位置づけることを主眼とする¹²⁾。ライフヒストリー研究法は、社会科学研究的なものとされてきた実証主義的アプローチに対する新しいアプローチ法として、解釈的客観主義アプローチや対話的構築主義アプローチという方法をとっている。実証主義的アプローチの実現には広範囲で大量にとられる量的調査資料が必要であるのに対して、解釈的客観主義アプローチや対話構築主義アプローチの実現には狭い範囲内で長期間かけてとる質的調査資料が必要である¹³⁾。どちらのアプローチ法にもメリットはあるが、質的調査法は帰納論的な推論を基本としながら語りを解釈し、インタビューを重ねることによって社会的現実を明らかにする点に利点がある。

さらに、量的調査法と比較すると、全体的かつ歴史的であり、新しいトピックを発見し知識をより深める索出的機能を持つともいえる。少数の調査者で調査を遂行でき、資金援助が少なくてもその分、利害関係もなく自由な論争やトピックスを上げることができる点や、人々の内部の声を聞くことができ、より深い文化理解を促すだけでなく、彼、彼女ら

11) 桜井厚『インタビューの社会学——ライフヒストリーの聞き方』せりか書房、2007年。

12) 同書、7-12頁。

13) 同書、13-31頁。

自身のちから（empowerment）ともなりうることもその利点のひとつである¹⁴⁾。欠点としては、狭い範囲内の被調査者の記憶を頼りに起こすデータを下にした資料であり、その信憑性が問われることがあげられる。しかし、近年ではその記憶のされ方自体に意味があり、語り方までもが被調査者に対する理解を深める鍵とされる。信憑性を補うためには、口述資料の記述と同時に、実証主義的な量的調査によってとられた資料の検討を行うことが必要であると考えられる。双方の研究を行うことは、よりローカルな視点と広範囲なグローバルな視点を繋げることが可能である。このように、ライフヒストリー研究法の利点と欠点を整理しその有効性を踏まえたうえで、次章ではローカル社会における人々の語りを紹介する。

II. サカテペック村のカシケに関する語り

私は2006年8月から1年間、天理大学の交換留学生としてプエブラ栄誉州立自治大学（Benamérita Universidad Autónoma de Puebla：以後 BUAP）に在籍し、社会人類学部の学生と共にシエラ・ネグラ地方マサテコ人居住区で現地調査を行い、学士論文では当該地域で行われる「死者の日」の儀礼についてまとめた。そして2009年7月から再び1年間、大阪経済大学大学院・人間科学研究科に在籍しながら、日墨交流計画研修生として再びメキ



出所：<http://www.puebla.ws/puebla.gif>

（図1）マサテコ人居住山岳部：円形指定部分

14) 同書、55-56頁。

(表1) シエラ・ネグラのマサテコ村落別人口

村 落 名	人 口	世帯数
マサツォンゴ (Mazatzongo)	887	194
グアカマヤ (Guacamaya)	314	57
テペシロトラ (Tepexilotla)	346	72
サカテペック・デ・ブラボ (Zacatepec de Bravo)	242	54
ガラパタ (Garrapata)	101	19
ジョバラスト (Yobalasto)	189	35
オバテロ (Ovatero)	465	18
テポサパ (Tepozapa)	50	10
ピロラ (Pilola)	195	46
カルピントロ (Carpintero)	不明	42
アテシヤック (Atexac)	不明	42
テコロテペック (Tecolotepec)	不明	73
ブエナ・ビスタ (Buena Vista)	555	不明
アグア・プリエタ (Agua Prieta)	67	不明
ランチョ・ラ・コルネタ (Rancho la Corneta)	65	不明
セロ・デル・ファイサン (Cerro del Faisan)	78	不明
ラ・クンブレ (La Cumbre)	397	不明
テキステペック (Tequiztepec)	212	不明
テクアナパ (Tecuanapa)	60	38
ペニア・アルタ (Peña Alta)	163	19

BUAP 研究グループによる2004年の調査資料をもとに作成

シコに滞在した。メキシコでは国立社会人類学高等調査研究所 (Centro de Investigaciones y Estudios Superiores en Antropología Social: 以後 CIESAS) に所属しながら、計 6 回サカテペック村で現地調査を行った。II ではこれまで収集した民族史的データとインタビュー調査の資料をもとに、サカテペック村の概略とカシケに関する語りをまとめる。

1) シエラ・ネグラ地方、サカテペック村の概略

シエラ・ネグラ地方はメキシコ中東部、プエブラ州南部のベラクルス州とオアハカ州との州境地帯に位置する (図 1)。シエラ・ネグラ地方に点在する各村落は、行政上はコヨメアパン行政区とサン・セバスティアン・トラコテペック行政区 (以下、トラコテペック) に属している。サカテペック村はトラコテペック行政区に属する人口約 300 人の村である。シエラ・ネグラのマサテコ人居住村落は、最大で 900 人程度 (マサツォンゴ村)、最小で 50 人程度 (カルピントロ村) であり、サカテペック村は其中で中規模村落である (表 1)。

【未整備なインフラストラクチャー】

シエラ・ネグラ地方は、地形的理由からインフラストラクチャーの整備が進まず隔絶地



(写真1) 工事中の道路 2009年9月長谷川撮影

域であるが，なかでも当該村落はガス，水道は未整備で生活用水を天水に頼っている。数年前までは自家発電機に依存した少数の世帯があったが，現在では電気・電話線の配線工事が当該村落まで普及したものの，トラブルが日常的に生じ，修理工事に相当の日数がかかる。なお，現在メキシコにおいて携帯電話の普及が進んでいるが，シエラ・ネグラでは電波圏外のため使用不可である。そのような状況のなかで，2007年の調査時は村に存在しなかったインターネット通信が2年後には開通していた。また，2年前に比べると道路が拡幅工事され雨季でもバス便があり，人々は頻繁に都市部を往来するようになった。村の「インターネット・カフェ」が誕生したいきさつは，ビクトリア（20代女性）の恋人が都市部出身で，彼女のために衛星アンテナとパソコン・セットを買い揃えたことにある。道路網については，現在，テウアカンからシエラ・ネグラの各共同体をつなぎ，トラコテベックへ続く道路が建設中である（写真1）。2007年の時点ですでにテウアカンから，サン・フアン・クアウトラ，サカテベック，ガラパタまでが建設され，その後はテコロテベック，テキステベックをつなぎ，トラコテベックへ向けての道路が建設されると言われていた。しかしながら，2年を経た現在に至るまでその道路はガラパタ村までしか繋がっていない。そのため近隣共同体諸村落の往復は徒歩しかなく45分から75分はかかる。また，村落間を結ぶ山道の状態も，草木や岩に阻まれ足元が泥ですべるような悪路である。

【生計・生業】

当該村民の生業は農業で，コーヒー，トウモロコシ，トウガラシ，サトウキビ栽培が主

である。サトウキビはアグアルディエンテと呼ばれる酒に加工・販売される。コーヒー栽培は国際価格の影響を受けやすく、原価下落で畑を手放す人が多かった1980年代前半から90年代後半に比べ、再び価格が上がった2000年以降に、コーヒー栽培に意欲を示す人が目立つ。近年になって村人から左官職人（albañil）が出てきた。これはメキシコ政府主導で村役場やコンクリート製校舎が修復を必要としているので、この作業職人を必要としたからである。都市部での就労経験のある若者が中心であるが、資格云々は不問であり手先が器用で体力があれば誰でも雇用される。日給は最大200ペソ（邦貨約1400円）で、家政婦もしくは薪拾いが日給100ペソ以下であることに比較すれば割りの良い仕事である。

若者たちの故郷へのUターン現象は世界的経済危機の影響を受け、都市部での就労機会が減少したことが主因であろう。他にも都市部の学校で教育を受けた若者たちが村に戻り家を新築し結婚している例が複数見られた。2年前は村民の移出が続いたが、今では都市部から回帰する数が増えた。彼らは汚染された空気と密集した民家に高い家賃を支払う都市部での生活は、少しも魅力的に映らないと口ぐちに述べる。それぐらいならば村で貧しくとも家族や慣れ親しんだ友人と共に生活する方が幸せであると¹⁵⁾。確かに水道・電気・電話などライフラインは未整備で不便であるが、肥沃な土壌の土地には自給用の作物を耕作さえすれば、飢餓に苦しむこともなく、また相互の互助システムが機能しているので、最低限の食料を分けあう人間関係が残っている。故郷ほど安心して暮らせる場所は無いので、現金収入のためだけに都市部に出稼ぎに出ていた若者たちが帰郷してきたことはごく自然なこととして受け止められる。

【公共施設】

各村役場には、行政機関・司法機関・留置場が備わっている。隣村マサツォンゴ村役場の場合は付近に屋根付多目的広場が建設され、またブエナ・ビスタ村は屋外バスケットコートが建設され多目的広場として機能している。医療施設は村落によって状況に差があるが、マサツォンゴ村では新築診療所に医師が常駐している一方で、当該村には診療所があっても医師は常駐していない。さらに人口の少ない規模の複数村落では数人の看護師が兼任し、もっと悪い状況では医療施設そのものが存在しない。したがって、そのような村落に重病患者が出ると、テウアカン市やプエブラ市まで搬送せざるを得ず、医師の不在と医療設備の不備はマサテコ地域全体の抱える問題である。隣のマサツォンゴ村には小・中・高等学校が、当該村には小・中学校が建設されているが、小学校すらない村落の児童は毎日3時間徒歩で通学してくる。高校の数は少なくほとんどの生徒が長距離を徒歩通学している。基本的に各共同体にカトリック教会が建てられているが聖職者は常駐せず、守護聖人の祝日や大祭のあるときに巡回してミサをあげる。マサツォンゴ村とブエナ・ビスタ村にはプロテスタント教会ができたものの、当該村は抵抗を示す者が多いため存在しない。各共同体に最低でも一軒の雑貨屋があるが商品の数は少ない。村と都市間道路が敷設され

15) 2009年9月、サカテペック村における若者への聞き取り調査資料より

ていれば、消費財はその都市から週に一度トラック便で店に運びこまれることもあれば、比較的大きな共同体村落でメルカード（市）のたつ日に商品が並ぶ。

上述したシエラ・ネグラのマサテコ人居住区はパパロアパン流域に隣接し、そこでは農地改革推進のために灌漑設備、衛生施設、水力発電設備、道路や学校の設立などの開発計画が行われた。パパロアパン・ダム建設計画の詳細については既述したので繰り返さないが¹⁶⁾、シエラ・ネグラ地方マサテコ人居住区とパパロアパン流域のマサテコ人居住区では都市化に大差が出ている。前者と後者の道路や水道、電気などインフラストラクチャーを比較すると、前者には開発の手が伸びずにきた数年間、どのような生活が営まれていたのだろうか。次節ではサカテペック村のある一家の夫人の語りからうかがい知ることになった。

2) 一介の徴税人から大地主へ、セフェリーノ・コントレラスの生涯

セフェリーノ・コントレラス（Seferino Contreras：以下セフェリーノ）は、1895年にテウアカン市近隣のナワ人居住村落に生まれた。当該村落は都市部近郊と言うこともあり、革命後の国家統合政策によるスペイン語教育や近代化の導入もいち早く、1940年代にはスペイン語とナワ語を話す先住民村落になっていた。彼は1950年の結婚を期にサカテペック村に土地を購入し、コーヒー農園を経営し始めた。当該村民と近隣のマサテコ人を雇用し、事業を拡大し財産を築いていき、それは1980年代前半のコーヒー豆原価下落の時まで続いた。メキシコにおけるコーヒー産業の始まりは1790年代のベラクルス州コルドバ市の歴史まで遡る。その後、同州内のウアトゥスコ、ハラパ、コアテペック、ソングリカ、オアハカ州のウアウトラと広まる¹⁷⁾。その後はメキシコ国内でコーヒー栽培に適したプエブラ州、チアパス州、ミチョアカン州、ハリスコ州、コリマ州へと拡大した。オアハカ州内のマサテコ社会に関する文化人類学的調査を行ったビジャ・ロハスによると、マサテコ地域におけるコーヒー産業の歴史は、あるフランス人夫妻が1893年にウアウトラ村の近くでコーヒー栽培をしたのが始まりである。その後、当該村よりコーヒー栽培に最適のサンタ・マリア・チルチョトラ村やサン・ホセ・テナンゴ村に広まっていった¹⁸⁾。シエラ・ネグラのコーヒー産業史に関する公文書は残念ながら見つからない。しかし、2005年から2009年にかけて BUAP の社会人類学コースの研究グループが行った同地域における聞き取り調査によると、マサテコ地域ではシエラ・マサテカ地方（オアハカ州）よりシエラ・ネグラ地方（プエブラ州）のコーヒー栽培が先に開始されているという。また、ビジャ・ロハスがマサテコ地域のコーヒー産業の発祥の地としたシエラ・マサテカ北部やシエラ・ネグラ南西部には、地域名は明かではないものの、シエラ・ネグラ地方北部から導入されたとい

16) 長谷川来夢「マサテコ研究始め」『人間科学研究 3 号』大阪経済大学人間科学研究会、2009年、73-86頁。

17) Carderón Martínez, José Carlos. *Configuración de la presencia mazateca en Puebla –influencia cafetalera y contradicciones locales*, BUAP (学士論文), 2009.

18) Villa Rojas, Alfonso, *Los Mazatecos y el problema indígena de la cuenca del Papaloapan*. INI., 1955.

う説もある。

さて、セフェリーノはサカテペック村を中心に、ジョバラスト村、ピローラ村、ガラパタ村など広範囲にコーヒー農園を所有し、さらに商機をつかむとシエラ・ネグラ、シエラ・マサテカ、シエラ・ソングリカの買人にコーヒー豆の卸売業をした。当農園はコーヒー栽培のみならず、加工場と保管倉庫を複数所有していた。当初、シエラ・ネグラのコーヒー豆は仲介農園に売却され加工された後に各地に発送されたが、シエラ・ネグラのコーヒー産業は次第に拡大し、他の農園を介さず自分の農園で栽培、焙煎加工・保管・売却をする者が現われていき、その中の一人にセフェリーノがいた¹⁹⁾。彼がマサテコ村落を訪れるようになった1940年代の職業は、シエラ・ネグラ村落地域の徴税役人であった。1940年代といえば、メキシコの高度経済成長期を迎えた時期であり、テウアカン市近隣のナワ村落出身の彼はスペイン語能力を買われメキシコ政府の末端組織に雇用された。彼にとってシエラ・ネグラは徴税場所に過ぎなかったが、メキシコ政府とスペイン語を介さないマサテコ先住民の仲介的役職を巧妙に利用していくうちに、次第にシエラ・ネグラ地方で力のあるカシケ（領袖）へと変貌していった。それは、例えば納税能力のない先住民に金を貸し、納税期間を延長するなどの利便を図り恩義を着せ、次第に経済的勢力を拡大していった。最終的に借金を返済できない先住民に対して、彼らの土地の権利書を要求し、しだいに所有地を増やしていった。こうして拡大した土地でコーヒー農園を開始し、村人を雇用した。さらに、彼は雑貨商品を扱う商店を開き妻にその経営を任せるようになった。彼は農園で働く村人が祝祭や病気などで現金が必要となれば金を貸したし、また、開店した商店で生活必需品を「付け払い」で購入できるようにした。結果的に村人はセフェリーノに対して借金をし続け、一方でセフェリーノを家父長とするコントレラス一家はコーヒー農園の経営で経済力を増し続けていったのである（写真2）。

シエラ・ネグラのマサテコ人の多くは、コーヒー農園で働くためにシエラ・マサテカから移住してきた者が多い。とりわけ、ピローラ村（シエラ・ネグラ地方）には、サンタ・マリア・チルチョトラ村（シエラ・マサテカ地方）に親戚を持つ者が多い。中には自分たちはコーヒー栽培でこの山林を開発したが、コーヒー農園で働くためにシエラ・ネグラを訪れ、生計をたてるために自分の故郷から離れざるを得なかったという言い方をする²⁰⁾。つまりセフェリーノも含め、1940～50年代にシエラ・ネグラのマサテコ人居住区には他所からの移住者が多く居住していたということになる。サカテペック村に住むマサテコ人にセフェリーノの印象を聞くと、彼のせいで自分の土地を失ったという話がでることがある。セフェリーノは1995年に100歳で他界し、家族はサカテペック村に住み続けている。カシケとして築きあげた土地と財産は、コーヒー豆原価下落を期に減少し始めるが、現在もなおコントレラス一家は当該村落で権力を持っている。こうして彼は一介の徴税人から広大なコーヒー農園の地主として土地のカシケとなったものの、1980年代初頭、コーヒー豆の

19) Carderón, op. cit. pp 72-78.

20) 2006年11月 BUAP 研究グループとの共同調査資料より。



(写真2) マグダレナの家 2009年11月長谷川撮影

国際原価の下落で、コントレラス一家はコーヒー産業から手を引くことになる。借金こそせずに済んだとはいえ、価格下落でコーヒー豆はゴミ同様になったとコントレラス家の者は愚痴る²¹⁾。一家9人の生計を維持するために、土地を少しずつ手放すことになり、子供たちに相続させる土地以外はすべて売却された。そのような経済危機に襲われながらも30年余が経過し、カシケであったセフェリーノを亡くした現在でも、コントレラス一家が未だに当村でカシケのような重要な存在であるのはなぜだろうか。

3) 気丈なマグダレナ・コントレラス

マグダレナは、フェリモン・セグラ・マリノとラウラ・アンドラデ・アギラルの間に、1933年、第一子、長女としてシエラ・ネグラ地方、コヨメアパン村に生まれる。1歳半違いと7歳違いの妹2人、8つ違いの弟を1人持つ4人兄弟である。マグダレナが生まれた当時、父親のフェリモンは34歳、母親のラウラは21歳だった。母親はシエラ・ネグラの小学校教諭をしており、その仕事の都合で彼女は当該地域の村々を転々とするようになる。1歳から9歳まではコヨメアパン村（ナワ人居住区）で育ち、9歳から15歳まではオバテロ村（ナワ人とマサテコ人居住区）で育ち、15歳から17歳まではマサツォンゴ村（マサテコ人居住区）で育つ。村を転々としながらも、彼女は幼少時から母方の祖母を慕っていた。そして祖母が職業としていた呪医と助産婦としての技術を共に過ごす中で自然に得ていった。同じメソアメリカでも、グアテマラやメキシコ南部のマヤ地域では夢で召命を受けた者だけが助産婦となれるとされたり²²⁾、あるいは代々の助産婦の家系に育ちながら村の医

21) 2010年マグダレナとのインタビュー記録より。

22) 桜井三枝子『グローバル化時代を生きるマヤの人々』明石書店、2010年、258-259頁。



(写真3) コントレラス家 セフェリーノとマグダレナおよび5人の子供たち
マグダレナ婦人提供 (1960年代撮影)

師に介助法を習ってその職を継ぐという事例があるが²³⁾、彼女は祖母の考えと教えからその職を継ぐことになる。彼女は兄弟の中でもとりわけ落ち着きがあり、呪医の術に関する秘密も守れたので、祖母は彼女の中に呪医としての才能を見抜いていたのだらうと、後に彼女自身が私に語ってくれた。父親はアルコール依存症で、彼女が幼い時に家を出てしまった。

オバテロ村に住んでいた際に、マグダレナは、メキシコ政府の徴税人セフェリーノに求婚された。結婚時、17歳のマグダレナに対して、セフェリーノは55歳と高齢であった。結婚後はセフェリーノとシエラ・ネグラのサカテペック村に土地を買い、コーヒー農園を営みながら家を建てて小さな商店を始める。商店を営みながら、幼少期から祖母に教わった知識で助産婦として妊婦の世話をしたが、夫が呪医の仕事を嫌うので祖母から伝授された知識を使うことはなかった。男尊女卑の考えが根強い村落内で、夫は妻の地位のほうが高くなることを危惧していたのだらうと彼女は語る。セフェリーノと彼女の間には10人の子供が出来た。そのうち3人は赤子の時に病死し、残る7人は都市部に移住して生活しているが、機会を作り代わる代わる彼女を訪ねてくる(写真3・4)。

4) カシケの未亡人、マグダレナ・コントレラスの人望

1980年代初頭のコーヒー豆原価下落時まで、彼女は夫の仕事を助け、出産・育児をしつつ家事を続けるなど重労働をこなしてきた。妊娠・出産後の安静にしなければならなかった時期も、昼夜問わず働き続けた。朝はコーヒー農園の被雇用者数十人の食事を用意し、

23) ブリジット・ジョーダン著・宮崎清孝・滝沢美津子訳『助産の文化人類学』日本看護協会出版会、2001年、22-23頁。



(写真4) コントレラス家と BUAP 研究グループの集合写真
2009年9月長谷川撮影

昼は商店の経営，そして夜は収穫したコーヒー豆の焙煎監督を行った。まったく休む暇も無く若さで乗り切った。しかし，コーヒー豆原価下落を境に，彼女の仕事は一変する。夫は経済的打撃という現実を受容できず，家父長的権威を失墜し呆然とした。この夫に変わり，彼女は家族を守るため新しい収入方法を見つけなければならなかった。セフェリーノは1995年に他界するまでおよそ15年間というもの，家庭の中で放心したままで時間が過ぎた。こうして残された子供たちの養育をしながら生計を立てるために，彼女ができたことは，幼少期に祖母に教わった助産婦と呪医の仕事だった。夫の意向で封印してきた呪医の仕事も，村人の依頼があれば積極的に受け始めた。信仰心の篤いカトリック信者であるマグダレナは，夫が自害することを恐れ見守りつつ，家族を守るために奮闘し始めた。カシケ一家としてともすれば嫌悪感を抱かれていたコントレラス家が現在も当該村落で村民の人望を集めてきたのは，彼女が夫に代わり築き上げた助産婦と呪医としての仕事にあるだろう。呪医としての地位を確立するまで，彼女は貧しいものからは治療費をとらなかった。経済危機が訪れたのは自分たちだけではない，貧しいものはさらに貧しくなったのだと彼女は当時のことを語る。現在でも現金を持ち合わせぬ村人からは，野菜や豆，トウモロコシや薪などと引き換えに治療を行うというやり方を続けている。私の調査期間中も，治療費に代わってトウモロコシを彼女に贈る村人を見ている。

コーヒー園の閉鎖と同時に商店経営も，コーヒー産業による収入が減少し商品仕入れが不可能となり閉店するしかなかった。そして彼女は7人の子供たちを育てるため片手間に行っていた助産婦と呪医としての仕事を本格化した。助産婦としても呪医としても，徐々に彼女の治療術と温かい人間味が村人の信頼を得た。サカテペック村には2人の呪医がいる。マグダレナと，もう1人はドン・ホアキンと呼ばれるマサテコ人男性だ。ドン・ホアキンは，サカテペック村と隣村ジョバラスト村の中間地点に住んでいる。隣家はなく，主

要な山道をそれたところにひっそりと暮らしている。彼女曰く、同業者の2人は争うこと無く上手く関係を築いている。互いの能力を知った上で協力しながら患者に適した治療を行っている。マグダレナは病気や怪我に対する数種の治療薬を処方するが、さらに苦痛を和らげるマッサージ、骨折の場合に簡易ギブスをあてる、傷口の縫合を行うなどができる。私も、腹痛から筋肉痛まで、体に痛みがあるときは彼女に世話になっていた。自分から治療を頼んだことは無いが、顔色や行動で彼女の方から先に言い当てられてしまうのである。腹痛や貧血の時は、食事の時に煎じた薬草茶を供してくれた。赤や黄色の薬草を煮込んで汁に砂糖を加え苦味を抑えている。筋肉痛の時は、当該地域で作られているアグアルディエンテというサトウキビの酒と薬草を混ぜたものを体に塗ってマッサージしてくれた。そしてそれを就寝前に飲料する。アルコール度が強い酒で、喉が焼けるように感じるが、翌日の筋肉痛を考えれば少量の酒に耐えるほうがよほど楽であった。

当該村落の2人の呪医を村の診療所の看護師は良く思っていない。診療所は医師も時折訪ねて来るが、常駐しているのはテウアカン市の社会保険庁（IMSS）から派遣された若い女性看護師1人だ。看護師は骨折や切り傷など、簡単な治療しか行っていないが、それでも村の人は何か軽い怪我をした時は彼女を頼りにしている。とりわけ、若者は呪医よりも看護師を訪れるほうが多いようだ。診療所側は呪医の治療法を科学的でないという理由で否定しており、最近では村での出産に助産婦が立ち会うことも公にされない傾向がある。マグダレナによると、診療所側が助産婦の出産介助は衛生上問題があるからテウアカン市の病院まで行くよう勧めるせいだと言う。テウアカン市に親族でも住んでいれば話は別だが、同市までの交通費、出産前後の数日の滞在費用、介助者の有無など、どう考えても村の貧しい女性が簡単にこのように巨額の出費ができるはずがない。よって、診療所側の勧めはともかく、村の妊婦は隠れて助産婦を呼び、自宅や助産婦の家で出産するのが実態だ。

このように、カシケであった夫セフェリーノの逝去後むしろ、マグダレナは村で助産婦と呪医としての立場を活かし、村人からの信頼を集めてきた。しかし、その道のりは長かった。セフェリーノの悪評は、マグダレナの息子たちにも及ぼされ、特に、一家に経済力のあった時代に学校に通う年齢だった長男と次男は、マサテコ人の間でいわゆる「金持ちのわがまま息子」扱いされている。交友関係を見ても、長男のほうは殆どサカテベックの人たちとの交友はないように見えるし、次男に関しては若者にこそ「兄貴分」のように慕われているが、その若者たちの両親世代との交友関係はない。現在も彼女の家近くに代々コントラス家に仕える使用人の家がある。使用人は自分の雇い主であるコントラス家について少なくとも表立って悪く言うことはないが、村内で悪い噂がある。たとえば、次男は徒歩ではなくラバで通学し、当時は靴を履く子供など居なかった中で彼はピカピカの靴をはいていたという。ラバから降りる時に泥や土の汚れたところを踏んで靴が汚れた時は、ラバ引きの使用人が母親である彼女に怒鳴られたことがあったらしい。村人の中には「ほとんど赤い絨毯でも敷いて（次男を）歩かせるよう細心の注意をした」という者もいる。また、私は彼女が使用人家族の子供に、納屋の掃除をさせた時のことを思い出す。午前中から掃除しに来た子供は、お昼頃に、「終わったよ、おばさん」と報告に来た。彼

女は子供に昼食を与え、その後、掃除を確かめに行った。「これも綺麗にしなきゃダメよ。丁寧にお願ひよ」などと言いながら、また別の仕事を与える。何度も終了したと報告に来る子供に別の仕事を与え続け、結果的に子供が仕事を終了したのは午後5時過ぎだった。私は、彼女の「雇用者」として、そして「元カシケの妻」としての厳しい顔を見た気がした。子供に日給いくら支払らっているのか聞いたところ、20～40ペソだという。日本円では140円から280円くらいの低賃金である。村落内では人を雇用すること自体が経済力を示し、雇用できる財力のある者は少ない。それゆえ、この日給が不当に安いと、一例だけはいえないだろう。確かなことは、彼女は仕事に対して、とても厳しく考えているということであり、その考えはおそらく、彼女が苦労した経験と、そして夫がカシケであったという一種の権威的な誇りがそうさせているかもしれない。

無視できないことに、元カシケ一家が村で重要な役割を果たしていることを報告しておかなければならない。それは、カシケは悪人扱いされることが多いが、村人が困った時に彼らを守る役割を果たしてきたことである。実はその点が、現在もコントララス一家が村でカシケのように暮らしていける理由である。生前のセフェリーノは、村の祭事や公的事業の際に経済的支援を行うことが多く、村のために寄付金を出していたと彼女は言う。セフェリーノの死後、コントララス家の財力が低下したのちは、マグダレナが村人のために病気の治療を行ってきた。村人の命を守る役を果たすことで、村人にとって彼女は必要な存在であり続けている。彼女は元カシケの妻としての威厳を守り、経済的に苦しいとはいえ、村の祝祭時には何らかの寄付をし続けている。例えば教会でろうソクが不足な時はその費用を工面し、教会のカーテンが破れたり、聖人像に着せる衣服が古くなると、夜なべ仕事をして新しい衣類を縫い上げ無償で寄進し、村人に尽くす。彼女の善行を身近で見ているのは村の女たちである。亡き夫カシケの悪評を言う男たちに比べると、女たちの反応は少し違っている。助産介助をしてもらい、家族の病気を治してくれる彼女を批判する女性は少ない。私の行ったインタビュー調査でも、村の女性たちから直接セフェリーノの悪口を言うのを聞いたことはない。さらに、彼女が村で権威を持つ証拠に、彼女や彼女の娘たちが多くの子供たちのコンマドレ（代母）であることがあげられる。マグダレナのほうはもう本人も数え切れないほどの子供たちの代母であり、娘の中では特にマサツォングで看護師を勤める長女が、マサツォング村とサカテペック村と合わせて約100人の代子を持っている（写真5）。成人儀礼や結婚式など、マグダレナも長女も事ある毎に村人に呼び出され、資金援助や祝祭の手伝いなど代母としての役目を果たしている。

5) サカテペック村における口述資料の分析・考察

サカテペック村のカシケ、セフェリーノは、フォーマルな政治体制と地方村落の仲介役として徴税人から大地主に変貌した。その記憶の歴史を遡れば、まるで国家レベルの歴史の一例がそのまま映し出されているように見えるが、実は二つの歴史の間には少し時間差がある。近代化を進める連邦政府とその連邦政府に取り込まれる地方社会の間に生まれる格差を搾取し、彼はカシケになった。しかし、彼が農園で多くの農民を雇用していた時期



(写真5) 長女クララ(右)と彼女の代子(左)
2010年5月長谷川撮影

は、メキシコ高度経済成長のピークを迎えた少し後、外国資本への過剰な依存から中央と周縁に格差が生まれ、経済危機の訪れを予兆していた時期だった。この予兆に彼が気づいていれば、1980年代初頭に財産の大部分を失うことはなかったであろう。コーヒー豆原価下落の情報が少しでも早く届いていれば、その経済的損失を食いとどめることができたであろう²⁴⁾。連邦政府が高度経済成長期の後に経済危機を予感していた頃、地方社会では未だ近代化による経済成長、更なる地域社会の発展を夢見ていた地方領袖がいたのである。メキシコ独立後の近代化政策の遅滞は、地方社会で現代に至るまでその残滓がみられ、シエラ・ネグラ地方ではそれは顕著に現れている。道路網の開設をはじめとするインフラストラクチャーの未整備もその一つであり、それはまさに国家レベルの歴史からは窺い知れない地方社会の実態のひとつである。

そして口述資料からもう一つ読み取れることがある。それは、地方社会のパトロン＝クライアント関係が、国家レベルの歴史で語られる政治・経済的な相互扶助関係だけでは説明できないということである。マグダレナが現在もカシケのように村人にとってパトロンの存在である理由のいくつかをそれを示している。彼女はコーヒー農園破綻の後、呪医と助産婦という立場でその威厳を守った。女性である彼女が、夫の代わりに政治的・経済的有力者に代わることは到底難しいだろう。特にコーヒー農園も商店も手放した彼女には、その術など無かったはずである。しかし彼女は、夫亡き今も村で重要な存在である。村で

24) 2010年4月マグダレナへのインタビュー調査より。

何かあれば、必ず彼女の耳に入るような、リーダー的存在である。それには、彼女の職業がインフラストラクチャーの完備されていない地方村落で、ライフラインの要になっていることが関係しているのではないだろうか。呪医にしても助産婦にしても、村人の直接的な「文化的再生産」に関係している。そして元カシケの妻としての政治・経済に対する感性、さらにカシケ時代に築いた財産で外部社会に送り出すことのできた息子たちとのネットワークもまた、リーダー的存在であり続ける要素のひとつである。外部からの情報や商品をいち早く取り入れ、村人に伝達するのも、彼女の役目である。そしてマグダレナと彼女の娘たちまでもが村で多くの子供たちの代母を勤めていることは、世代が代わっていく今後もコントラス一家が村落内で現在維持しているパトロン＝クライアント関係を再生産するであろうことを示している。彼女が築いてきた村人との人間関係は、国家レベルの歴史では語りきれない地方レベルの信頼関係の積み重ねにより出来上がったもののなのだ。

お わ り に

以上、サカテペック村のカシケ一家に関するフィールド調査の報告をし、ローカル社会の地方ボスの実態について考察を試みた。その結果、書承によるメキシコ史だけでなく、口承によりメキシコ史をリアルに理解することが出来た。人々の記憶としての歴史はその歴史を知ろうとする第三者に対して豊富なイメージを描写させ、身近な出来事として理解することを助けてくれる。今回の研究ノートでは未熟な分析・考察やより詳細な口述記録の提示など今後の課題も多く残ったが、ライフヒストリー研究法の有効性の一部を示すことが出来た。